ＪＲ東海労ニュース

№.１２０３
２００９年１月２７日
ＪＲ東海労働組合

人通りの少ない日曜日の早朝・力ずくで労働者を排除！

これが職を奪われる労働者に対する国家権力の本質だ！

私たちは、このような強権的・非民主的な対応を絶対に許さない！

東京地裁による強制執行が行われ、元従業員や警察官らで騒然とする京品ホテル前＝25日午前、東京都港区高輪で（安江実撮影）

京品ホテル　強制執行

明け渡し拒む元従業員ら退去

昨年十月に廃業した東京・品川駅前の老舗ホテル「京品ホテル」（東京都港区）の元従業員らが、解雇後も自主営業を続けていた問題で、東京地裁の執行官は二十五日、ホテル建物の明け渡しと退去を命じた仮処分決定に基づき、強制執行をし、関係者全員を建物外に退去させた。＝関連⑪面

元従業員や支援者、執行官に同行した警視庁機動隊員ら数百人が一時、ホテル前で押し合う騒動となった。逮捕者はなく、元従業員らが所属する労働組合「東京ユニオン」によると、数人がけがをしたという。

元従業員や支援の組合員ら二百人近くが同日早朝から、ホテル玄関をふさいで強制執行を拒否。執行官は同日午前九時ごろ、百人以上の機動隊員らと突入を開始した。

約三十分間押し合いが続き、組合員の男性一人が呼吸困難で救急車で運ばれる事態になって組合側が退去に応じ、執行官がホテル内に入って関係者全員を退去させた。

ホテル経営会社「京品実業」（港区、清算中）は、経営破綻した米証券大手リーマン・ブラザーズの日本法人子会社に約六十億円の負債があり、返済のためホテル売却を決定。昨年十月二十日に廃業、従業員ら約百三十人を解雇した。

元従業員らが地位保全の仮処分を東京地裁に申し立て、五十人前後が解雇翌日から自主営業を続けていた。同地裁は今月十五日、経営会社が申請したホテル建物の明け渡しと退去を命じる仮処分を決定した。

元従業員らは同地裁に仮処分決定への異議を申し立て、地位保全を求める訴訟も起こしており、現在係争中。

ＪＲ総連からも　多くの仲間たちが駆けつけた！

本音のコラム

「太陽のない街」

鎌田 慧（かまた さとし）

テレビを見ていて、強い憤りと悲しみがあった。「京品ホテル」の自主営業にたいする、強制執行の場面である。

労働者に退去を命じた東京地裁の裁判官は、長年勤めた職場から追いだされる労働者の悲しみを思ってみたのか。追い出された後、家族を抱えた生活もある。機動隊員だって、自分の父親のような老労働者を引きずりだしたくなかったはずだ。

労働者が生きるための労働争議に、機動隊を派遣する無神経は、もっと批判されるべきだ。争議は労使の和解で解決すべきもので、強制執行という強権はなじまない。争議権は、労働者の基本的人権であり、自主営業、自主生産は争議の平和的な手段である。

わたしの憤りが収まらないのは、五十年前、わたし自身、三カ月ほど「自主生産闘争」をやったことがあるからだ。このときは、都の労働委員会が斡旋、和解している。その後も、労組員による生産管理闘争はめずらしくなかった。職場と生活を守る手段だ。強制執行は最悪の、非民主的な強権解決である。裁判官の人権感覚を疑う。

労働争議に警官隊を出すのは戦前の話だ。徳永直の「太陽のない街」は、東京都文京区の共同印刷の労働争議がテーマだが、「蟹工船」とおなじ一九二九年の作品である。

日本の経営者や裁判官の頭は、戦前に行ってしまった。戦後に戻ってこい！（ルポライター）

京品ホテル　強制執行

飛ぶ怒号　届かぬ声

元従業員「必ず戻ってくる」

「強制執行反対」「警察官は帰れ」。解雇後も自主営業を続け、強制執行に抵抗する元従業員ら。執行官に同行した警視庁の機動隊員は、力ずくで元従業員や支援者を排除していった。東京・品川駅前の京品ホテルは25日、騒然とした空気に包まれた。「必ず職場に戻る」。元従業員らは法廷闘争を続ける方針だが、職場復帰できるかどうかは厳しい情勢だ。（❶面参照）

強制執行が行われ、警察官らともみ合う京品ホテルの元従業員や支援者ら＝25日午前9時29分、いずれも東京都港区で

ホテル玄関前には東京地裁による強制執行に備え、午前五時ごろから、元従業員や元従業員が所属する労働組合「東京ユニオン」の組合員らが集結。「従業員の生存権を奪わないで」と書かれたゼッケンを着け、腕を組んで「人間バリケード」をつくった。

警視庁の機動隊員も続々と到着。午前七時ごろ、執行官が警備員とホテル内への立ち入りを試みたが、失敗。いったんは組合側との話し合いに応じたが、午前九時ごろ、機動隊員を伴って強制排除に乗り出した。

機動隊員が元従業員らを一人、また一人と引き離していく。「痛い」「やめろ」「人の心がないのか」。怒号が飛び交う。約三十分間、激しいもみ合いが続いた後、執行官がホテル内に入り、関係者全員を外に退去させた。

元従業員の金本正道さん（五〇）は「こんな悔しい思いのまま終わらせない。世の中の正義は何か。必ずこの職場に戻ってくる」と泣きながら訴えた。

元従業員の大内次雄さん（五〇）も「（経営会社の）社長と和解したかった。こんな事態になっても、社長が話し合いに応じないのが残念だ」と悔しさをにじませた。

一方、東京ユニオンの渡辺秀雄・執行委員長は「強制執行で組合員の雇用問題は何も解決しない。解決に向け、苦しくても頑張っていく」と法廷闘争の継続を強調した。

強制的にホテルから退去させられ、泣きながらシュプレヒコールを上げる金本さん＝25日午前10時1分

96日間に及んだ自主営業

一八七一（明治四）年創業の京品ホテルの経営会社「京品実業」は、バブル期の多角経営に失敗して借金がかさんだ。借金返済のためホテルを売却することにし、昨年五月、急きょ従業員らに同十月二十日での廃業と解雇を通告した。

従業員側は「営業利益の出ているホテルを廃業するのはおかしい。従業員に放漫経営のしわ寄せをした」と反発。「会社が納得できる説明をせず、話し合いに応じない」として法的措置をとりながら、解雇後も五十人前後が自主営業を継続。経営会社との交渉の糸口を探ってきた。

京品実業の小林誠社長は当初から「廃業、解雇の方針は変わらない」と主張。解雇された元従業員らが自主営業を始めた後も、ホテルを「空の状態」で売却する方針を崩さず、元従業員との膠着状態が続いていた。

ホテルと一部の直営飲食店での自主営業は年を越し、二十五日の強制執行の前日までで九十六日間に及んだ。新しい職場に移っていく元従業員もいたが、残った人たちは交代で働き続けた。

「利益も出た」

元従業員らは自主営業で、飲食店の仕入れや光熱費を賄えるだけの利益を上げた。この利益から給料は得ておらず、諸経費を除いた残金は経営会社に渡すため、銀行口座にプールしている。

元従業員らが所属する東京ユニオンによると、これまでに支援の署名は五万人を超えているという。

1月25日、普段は人通りが少ない日曜日の朝、品川高輪口駅前は機動隊と労働者の怒号で騒然とした状況となりました。不当にも解雇された「京品ホテル」の労働者たちが自主営業を続けている建物の明け渡しと撤去を命じる仮処分が裁判所によって下されたために、強制執行が行われたのです。

雇用問題が深刻化している中で、このような対応に疑問を感じます。